

『その問題、経済学で解決できます。』

ウリ・ニーズィー(著), ジョン・A・リスト(著), 望月 衛(翻訳)

食料・環境領域 主任研究官 佐々木宏樹

本書は、気鋭の経済学者にして「ノーベル経済学賞最右翼(本書帯より)」のウリ・ニーズィー教授(カリフォルニア大学サンディエゴ校)とジョン・A・リスト教授(シカゴ大学)が、「人を動かすインセンティブ」に着目し、教育・ビジネスから途上国支援までの幅広い分野を対象に、社会的な問題・疑問に対するアイデア、処方箋、教訓を記したものです。

- ・子どもの成績を上げるには?
- ・ワインをたくさん売るには?
- ・保育園のお迎えの遅刻をなくするには?
- ・娘の競争力を高めるには?
- ・お得に買い物をするには?
- ・恵まれない子に寄付してもらうには?
- ・社員の生産性を上げるには?

本書では、例えばこれらの課題について、実地で実験して答えを出す経済学研究の最先端のスタイルとそこから得られる含意を解りやすく紹介しています。

社会で起こっている物事を洞察する際、2つの変数が「因果」なのか単なる「相関」なのかを見極めるのは非常に難しい課題です。従来、経済学者は、こういったことを「実験」によって確かめることには懐疑的でした。なぜなら意味ある実験を行うためには、調べたいこと以外を一定に保たないといけません。例えば、遺伝子組換え作物を摂取することによるマウスへの健康影響を観察するのと同じです。しかし、複雑な経済活動を対象とする限り、それは非常に大変です。そこで、被験者を教室に集め、仮想的な経済状況でマーケットや制度について実験する方法が生まれました。しかし、教室の中だけで行われる実験だけに頼るといふあり方も段々変わってきました。ニーズィー教授やリスト教授は、多くの実地における実験を成功させてきました。対象を無作為に抽出し、ある介入を実施するグループとしないグループに分けて、効果を比較します。一般に、「ランダム化対照試行(RCT: Random Control Test)」と呼ばれる手法です。

本書で紹介されている実験をひとつ紹介します。彼らは、保育園10カ所で、子供を迎えに来るのが10分以上遅れた親御さんから3ドルの罰金を取る制度を導入しました。しかしこのインセンティブはうまく働かず、逆に遅れてくる親御さんは大幅に増えたのです。従来、時間までに迎えに行くことは「正し

いこと」でしたが、遅刻の価格をはっきり示したことで、親御さんたちからは、「無理してまで時間に間に合わなくともよい」、「延長保育の値段としては安い」と判断されたのです。

評者は、2004年に「農林水産政策研究所レビューNo13」において、ノーベル賞を受賞したカーネマン教授(プリンストン大学)と故トベルスキー教授が編著者となって、行動経済学の主要論文を集めた『Choices, Values, and Frames』を紹介しました。丁度10年経ちましたが、この間、人間の実際の行動を重視した経済学に対する世間の関心は圧倒的に高まりました。日本語で読める書籍も、現在では、おそらく20~30冊はあると思われます。専門書だけでなく、ビジネス書や啓蒙書の類も刊行されるようになりました。世の中の事象の分析や制度設計のためのツールとして大きな可能性を秘めていると考えられるようになったからでしょう。

どんなインセンティブを与えれば、正しい行動をしてくれるか、好ましくない振る舞いを避けてくれるかという本書が一貫して扱う課題は、政策の企画・立案過程での根本的な問いそのものです。実際、英国ではキャメロン首相の下に通称「ナッジ\*・ユニット」が2010年に設立され、理論を実行に移しています。米国では、農務省が行動経済学・健康食選択研究センターを設立することを本年7月に発表しました。農業政策分野では、米国の保全休耕プログラムを対象として、農務省と経済学者がチームを組んで、金銭的インセンティブと同時にナッジの効果を実地実験によって検証しています。

筆者らは、冒頭で「どんなインセンティブが人を動かすのか完全にわからない限り、新しい政策や政策の変更が、うまくいくかどうかは予測できない」と述べています。きっと、理論を実地で確かめるという手法は今後更に進んで行くでしょう。

\*ナッジ(Nudge)とは、各人の選択の自由を害することなく、気づきを与えて人間の行動をより望ましいものになるよう促すこと。



『その問題、経済学で解決できます。』  
著者/ウリ・ニーズィー(著), ジョン・A・リスト(著), 望月 衛(翻訳)  
出版年/2014年9月  
出版社/東洋経済新報社